

## 【書評】

AUSTIN, Edie and Lucinda CHODAN  
*History Through Our Eyes: Photos of People and Events That  
 Shaped 20th Century Montreal*, Véhicule Press, 2020

大石 太郎  
 OISHI Taro

朝起きてコーヒーを飲みながら自宅に届いた新聞に目を通す。21世紀初頭にはまだふつうだった光景はいまや風前の灯火となりつつある。あくまで印象にすぎないが、日本やヨーロッパに比べると北アメリカではコロナ禍以前から新聞の電子化が進んでおり、紙の新聞をみかける機会が激減していた。モントリオールでも、かつては地元紙に加えて北アメリカやヨーロッパの有力紙を販売する店舗が中心市街地にくつもみられたが、コロナ禍以前に淘汰されてしまい、外国の新聞はもとより、トロント拠点のカナダ全国紙グローブ・アンド・メール (*The Globe and Mail*) 紙でさえ、いったいどこで買えるのかという有様になっていた。また、地元紙さえ置いていないデパナー（コンビニエンスストア）も増えていた。コロナ禍を経てその動きはあっという間に加速したように見える。かくいう評者も、日頃は紙の新聞ではなく、紙面イメージのアプリを使ってタブレットやスマートフォンで読むようになった。こうした技術革新によって、居場所にかかわらず、世界各地の新聞をリアルタイムで読めるようになったのは、地域研究に取り組む研究者にとっては画期的なことであろう。もっとも、紙面イメージのアプリを好んで利用するのは一定の年齢以上の人を中心のようで、こうしたアプリは過渡期的な存在に終わりそうだという。どのようなかたちになっても新聞の機能は残るだろうが、日刊の冊子という形態で記憶されるのは、紙に慣れ親しんだ世代までかもしれない。

前置きが長くなったが、本書はケベックに唯一残る英語日刊紙のモントリオール・ガゼット (*The Gazette*) 紙が所蔵する膨大な写真でモントリオールの20世紀をふりかえったものである。有力な全国紙がいくつも存在する日本にいると理解しにくいのが、新聞は本来都市のもので、とくに北アメリカではその傾向が強かったかもしれない。紙の場合、どこかで印刷したものを届ける必要があり、日本でも全国紙の朝刊が朝に届かない地域があるけれど

も、広大な領域に都市や村落が点在する北アメリカではその日のうちに届けられる範囲におのずと限界がある。そうした事情を反映してか、北アメリカでは週刊の新聞を郵送で購読する習慣が最近まで続いていた。いずれにしても、各地で発行されてきた新聞はその土地の記憶の宝庫であり、本書はそれを十二分に活用して編まれたものである。

本書は2019年にガゼット紙に掲載された同名の連載をもとにしたものであり、1月1日から12月31日までの、2月29日をのぞく毎日について、その日のできごとにまつわる1枚の写真とその解説で構成されている（写真自体は必ずしもその日のものではない）。最も古い日付は1916年2月14日、最も新しい日付は1999年11月13日で、タイトルにあるとおり、20世紀のほとんどの時期が網羅されている。最も多く取り上げられているのは1970年代の91日分であり、それを含め301日分が1950年以降のできごとである。ほとんどの写真はモノクロであるが、18枚がカラーであり、カラーの初出は1985年3月20日である。

著者の一人で刊行当時ガゼット紙の主筆を務めていたルシンダ・チョダン (Lucinda Chodan) が「はじめに」で述べているように、当然のことながら本書には20世紀のモンリオール、ひいてはケベックの歴史を彩った事件や人物が数多く登場する。そのいくつかを紹介しよう。1980年5月20日はケベックの主権獲得をめぐる第1回の州民投票が行われた日であり、ルネ・レヴェックが敗北宣言をする姿とともに当時のガゼット紙の記事がふりかえられている。また、前日の5月19日も同じく1980年のもので、こちらは反対派を率いた当時のカナダ首相ピエール・E・トルドー、カナダ司法大臣ジャン・クレティエン、ケベック自由党党首クロード・ライアンを捉えた写真が選ばれている。そして、両日の記事を書いた記者の一人は、のちにカナダの公用語コミッショナーとなるグラハム・フレイザーであった。2回目の州民投票が行われた10月30日(1995年)の写真も、当然その主役が選ばれている。すなわち、「カネとエスニック票」発言が物議を醸したジャック・パリゾーの敗北宣言である。その3日前、1995年10月27日にモンリオールのカナダ広場 (Place du Canada) で開催された、ラブ・イン (Love-in) とよばれたカナダの結束を訴えるイベントも、集まった群衆が掲げる巨大なカナダ国旗の写真とともに紹介されている。集まったのは、他州からの参加者も含め、ガゼット紙が少なく見積もって10万人以上といい、反対派を率いた当時のカナダ首相クレティエンや、当時カナダ進歩保守党党首で、のちにケベック自

由党を率いて州首相となるジャン・シャレらがそろってカナダ国歌 O Canada を歌う場面がよく知られているが、逆に刺激されて投票行動を変えたケベコワもいたことだろう。写真を見ているだけでも、当時の緊迫した雰囲気は改めて伝わってくる。2 回目の州民投票のもう一人の主演であるルシアン・ブシャルは、この文脈では取り上げられていないが、ケベック現代史を彩る一人であることに変わりなく、カナダ下院議員の補欠選挙で当選した 1988 年 6 月 20 日にカナダ首相ブライアン・マルルーニーとともに登場している（写真は同年 6 月 12 日のもの）。このときブシャルは旧友マルルーニーの内閣に名を連ねるべく、駐フランス・カナダ大使から転身するのであるが、周知のとおり、ミーチ湖協定の批准失敗（1990 年）を受けて連邦政党ブロック・ケベコワ（ケベック連合）を立ち上げ、マルルーニーと袂を分かつことになる。ミーチ湖協定が調印されたのは 1987 年 6 月 3 日であり、マルルーニーと当時のケベック州首相ロベール・ブラサががっちり握手を交わすシーンが本書でも取り上げられている。

1976 年のケベック党の州政権獲得から翌年の 101 号法（フランス語憲章）制定に至る過程、さらにはそのケベック社会への影響についても数日が割り当てられている。まず、1976 年 11 月 16 日のガゼット紙の 1 面を飾ったのが、前日に実施された州議会選挙におけるケベック党の勝利である。その 2 日後の同年 11 月 18 日の写真は、ブラサ州首相とレヴェックの面会の様子であり、ソファに座るレヴェックの左手にはタバコがみえる。今では考えられないが、残っているレヴェックの映像にはタバコ片手に記者会見をしているものもあり、隔世の感がある。1977 年 4 月 1 日には当時の文化大臣で「101 号法の父」とされるカミーユ・ロランが言語に関する白書を発表し、それがフランス語憲章の基盤となった。フランス語憲章が約 40 日間、時間にして 200 時間の議論を経て州議会で可決されるのは同年 8 月 26 日のことである。この日にまつわる写真として選ばれているのは翌 78 年 6 月末に撮影されたもので、社名を示す看板が Superior Business Machines Ltd. から Superior Machines de Bureau Ltée に架け替えられる作業の場面であり、企業に与えられた猶予期限の同年 7 月 3 日を目前に控えた時期のものである。フランス語憲章への適応に関する記事は同年 1 月 27 日にもみられ、英語で書かれたメニューを背景にモンリオール市西郊ノートルダム・ド・グラスのレストランのオーナーの写真が掲載されている。レストランのメニューもフランス語にする必要があり、やはり期限は 7 月 3 日であったが、当時の記事によれば、顧客の約 9 割がアン

グロフォンだという写真の店を含め、多くのレストランはすでにフランス語に対応できていたという。ただ、よく知られるようにフランス語憲章の制定は大企業本社の州外への転出を招き、その代表格である保険会社サンライフのトロントへの移転が同年1月12日に取り上げられている。そして、フランス語憲章制定の影響が最も大きかったのが、フランス語を教授言語とする学校に子どもを通わせなければならない非フランス語話者の家庭であり、イギリスからモントリオール島西部のウエストアイランドとよばれるアングロフォンの多い地域に転入してきた家族の奮闘が1983年11月5日に紹介されている。なお、当時のフランス語憲章の規定を憲法違反として、カナダ各地で英語で教育を受けた親をもつ子どもがケベック州で英語を教授言語とする学校に通うことを可能にするカナダ最高裁判所の判断が示されたのは1984年7月26日であり、翌27日にガゼット紙の1面を飾った。

モントリオールの悲喜こもごもの都市史もさまざまに取り上げられる（以下、日付は本書によるもので、主に前日のことがらを報じる新聞記事の性質上、実際にその事象が発生した日ではない場合もある）。モントリオール万国博覧会の開幕（1967年4月27日）や女王エリザベス2世が宣言したモントリオール・オリンピックの開幕（1976年7月17日）は、モントリオールにとどまらず、ケベック史、そしてカナダ史にとっても重要なできごとである。今も語り継がれる事件として当然取り上げられているのが、1989年のポリテクニク銃乱射事件（12月6日）や1998年の豪雪（1月10日）である。ジャック・カルティエの最初の探検から450周年を記念した1984年のローマ教皇ヨハネ・パウロ2世の訪問も大きなできごとであった（9月12日）。1950年代から60年代にかけてはモントリオールの都市景観が大きく変わっていく時代で、路面電車の廃止（1959年8月30日）や最初の地下鉄車両のお目見え（1965年8月24日）、中心市街地の変化（1965年10月19日）などの記事がみられる。一方、1975年に開業したミラベル空港は1996年に旅客扱いを終了した（2月21日）。また、メジャーリーグ球団のエクスポズは1969年に最初のホームゲームを開催し（4月14日）、2004年シーズンまで存在した。世界的スターもしばしば来訪し、ミック・ジャガー（1972年7月18日）、マイケル・ジャクソン（1984年9月16日）、プリンス（1997年6月6日）などのコンサートに関する記事もある。

これらのほかに評者の興味をひいたのは、引っ越しの日の記事（1926年4月30日）である。私たちにとって、ケベックの引っ越しの日といえばカナ

ダ・デーの7月1日で、いかにもカナダへの対抗意識があるかのようであるが、本書の解説によれば、かつては法律で4月末日を賃貸住宅の契約終了日とすることが定められており、なんとその起源はフランス植民地時代にまで遡るといふ。すなわち、酷寒の冬に借家人が心ない大家に追い出されることがないように、ということだったそうである。それが7月1日に変わったのは1973年のことで、子どもたちが引っ越しの手伝いのために学校を休まなくて済むようにという配慮もあった。それ以来、引っ越しの日は法律で定められたことではなくなったが、2018年においてもケベック州では住宅賃貸契約の約8割が6月30日に終了し、モンリオールでは10万人以上が7月1日に引っ越したといい、例年新たに住む場所をみつけれない人が出るせいか、まるで風物詩のように、カナダ・デーとともに当日のケベックのトップニュースとなっているわけである。

このように、本書はあたかも日めくりカレンダーのように楽しみながら、モンリオール、そしてケベックの歴史を知ることができる。過去の写真が興味深いのはもちろんのこと、解説も簡潔ながら、(モンリオールやケベックに関するある程度の知識は前提になるかもしれないが)読者の理解を大いに助けてくれる。なにしろ365ものエピソードがあり、ここで紹介できたのはごくわずかにすぎず、政治から文化・芸術、ごく身近な生活の話題に至るまで、幅広いテーマが扱われているので、読者それぞれにおもしろいと思えることがありそうである。著者の一人チョダンが強調するように「ケベックの女性初」も多数取り上げられている。

なお、ガゼット紙はケベックの少数派であるアングロフォンの新聞であり、たとえばフランス語憲章の厳格化のような動きには明確に反対の立場をとるし、本書の解説にもそうしたガゼット紙の性格が反映されている面はある。一方で、たとえばフランス語メディアにはない視点を提供してくれるし、当然ながらケベック州外の英語メディアほどケベックに対して無理解でもない。フランス語圏でも英語圏でもない地域からケベックを研究する立場として、先入観をもたずに多くの人に手にとってほしい1冊である。

(おおいし たろう 関西学院大学)